

## 一、開会の挨拶

司会者 田中 浩

ただいまから、「どこへ行く民族と国家——方法論と分析視角について」というテーマで、国際比較政治研究所の第四回（一九九四年度）シンポジウムを開催致します。

はじめに、基調講演をなさってくださいますお二人の先生方を簡単に御紹介いたします。まず伊豫谷登士翁先生は、日本でもようやく真剣に取り組むことが必要となってきた「外国人労働者問題」についての日本での第一人者であり、『国際労働力移動』（東京大学出版会、一九八七年）、『外国人労働者と社会保障』（東京大学出版会、一九九一年）、『外国人労働者論』（弘文堂、一九九二年）など多数の著書、論文を書いておられます。次に小杉泰先生は、「民族と国家」を論じるさいに最も重要なテーマと思われるイスラーム世界研究の第一線で活躍されている先生であります。『現代中東とイスラーム政治』（昭和堂、一九九四年）、『イスラームとは何か』（講談社現代新書、一九九四年）などの御著書があり、とくに前著につきましては、一九九四年度の「サントリー学芸賞」受賞の榮譽に輝いた御本であります。

なお、これはいつものパターンであります。大東文化大学所属の、このテーマに関する専門研究の先生方に、コメンテーターになっていただき討論を盛り上げていくこととなります。今回は他学部からは、インド御専攻の広瀬崇子教授（国際関係学部）、アフリカ御専攻の岡倉登志教授（文学部）、および法学部政治学科の東南アジア御専攻の黒柳米司教授、ロシア御専攻の内田健二教授に御参加願っております。

ところで、今回のシンポジウムは、本年度から三年計画で全学的に取り組むことになっている、大東文化大学創

立七〇周年記念事業のテーマが、「二一世紀に向けての民族と国家」ということもあって、全学部的なプロジェクトと連けいしつつ研究会をすすめるということも、ひとつの大きな特色となっております。

戦後五〇年間ほど、米ソの対立を基軸にした「冷戦構造」が終結した時点で、今度は、従来からくすぶっていた多民族をかかえている国々において、民族紛争が大きくクローズアップされ、冷戦終結後の国内的・国際的問題として、その対応策がさまざまに模索されております。ここには、国民国家の基本概念とされてきた主権の問題、多言語主義・多文化主義・宗教問題をどのように考え、またどのように解決すればよいか、あるいは、そうした国々において連邦制を採用することの可否など、さまざまな思想上・制度上の解決を迫られる困難な問題が山積しております。

本日は、今述べたような問題を考えていくうえで、参加者の一人々々が、何らかのヒントをえることができ、またこの問題について相互理解がより深められれば、シンポジウムを企画した一人として望外の喜びであります。

では、伊豫谷先生から、お話をお願いしたいと思います。